

## 孟子の政治思想と『日本書紀』

潘蕾\*

Abstract: Mencius' thought, which forms a connecting link between the preceding Confucius and the subsequent Xun zi, is an important stage of development of pre-Qin Confucianism. It not only has important influence on Chinese politics, economics, culture, etc., in Chinese history, but also has far-reaching influence on Eastern and Western culture. Mencius' thought is distilled in his book *Mencius*. *Nihonkoku Genzaisho Mokuroku* (*The Catalogue of Chinese Texts Existent in Japan*) comprises 17,209 volumes written in middle of the Japanese Heian period, including 1568 ancient books from the Tang Dynasty. The Eastern Han Dynasty scholar, Zhao Qi's *Commentaries on Mencius Vol.14* can be found in this catalogue, confirming that *Mencius* had been introduced to Japan before the Middle of the Heian period. It is generally accepted in present Sino-Japanese academic circles that *Mencius* as part of the classics of Confucianism was spread widely after the inception of the Edo period. But, from reading *Nihon Shoki*, the oldest officially authorized history of Japan extant in the present day, the author finds that there are many elements of Mencius' thought contained in it. *Nihon Shoki* was finished in 720 C. E., yet its compilation can be traced back to the 10th year of the rule of the Emperor Tenmu (681 C. E.). It has a strong political color and obvious external awareness. After the victory in the Jinshin War, he Emperor Tenmu set up the régime, which attempted to user the book to defend the legitimacy of the Imperial family, and declared Japan's existence as a nation that was as developed as the neighboring countries of China and Korea. Against this background, the descriptions of each Japanese Emperor and their related political activities in *Nihon Shoki* are much influenced by Chinese history. Traces of Mencius's thought such as "benevolent governance", "people-oriented", "the Tang-Wu revolution (the expulsion of disqualified monarchs by King Tang and King Wu)", etc., can also be discerned in *Nihon Shoki*.

---

\* 潘蕾：北京外国語大学北京日本学研究センター講師。本稿は“北京高等学校青年英才计划项目 (Beijing Higher Education Young Elite Tescher project)”と北京外国語大学基本科学研究業務費の援助を受けて執筆したものである。

## はじめに

儒学では孟子は孔子に次ぐ重要な儒家として尊ばれている。孟子（前 372 頃～前 289 頃）の思想は、儒家の祖である孔子の思想を受け継いで発展させたものであり、中国後世の政治・経済・文化に多大な影響を及ぼした。孟子の思想は『孟子』という書物に集約されているが、寛平三（891）年ごろに成立した『日本国見在書目録』には「孟子十四齊卿孟軻撰趙岐注、孟子七陸善経注」<sup>1</sup>という記載がある。この記載から、遅くとも平安時代中期までに『孟子』はすでに日本に伝わったことが伺える。とはいえ、『孟子』が読まれる記録が平安時代中期までの史料には見られず、平安時代末期の公卿・藤原頼長の日記『台記』に『孟子』が読まれる最初の記録が残されていると思われる。つまり、『台記』の康治二年九月二十九日条に、藤原頼長の保延二（1136）年から康治二（1143）年までの読書目録が記されており、その中に「孟子十四卷、首付、永治元年、同音義二卷、首付、永治元年」<sup>2</sup>とある。

『孟子』が儒学の經典として広く日本人に読まれるようになったのは江戸時代に入ってからとされる。中国明末の文人・謝肇淛（1567～1624）がその著『五雜俎』の卷四・地部二に「倭奴亦重儒書、信佛法。凡中國經書、皆以重價購之、獨無孟子。云、有攜其書往者、舟輒覆溺。此亦一奇事也。」<sup>3</sup>という言い伝えを記録している。『孟子』を載せた船が日本に到着する前に必ず沈没するという言い伝えは、孟子の思想が日本人に受容されるどころか、排除されていたことを物語っている。このような言い伝えが生まれる背景として、孟子の説く「湯武放伐」の思想は、日本の政治体制がいかに変化しても天照大神の子孫である天皇がずっと政治体制の頂点にいるという思想と矛盾していることが挙げられている<sup>4</sup>。江戸時代後期に刊行された上田秋成（1734～1809）作の怪異小説集『雨月物語』にも、作者は「白峯」の主人公である西行法師の口を借りて孟子の「湯武放伐」思想の内容及び『孟子』を載せた船が日本に到着する前に必ず沈没することのゆえんを説いている<sup>5</sup>。

しかし、孟子の思想に対する忌避は古くからあったものではないと思われる。井上順理氏はその著『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』において、中世までの孟子の受容史を体系的に通観することにより、孟子の書が少なくとも奈良時代の初期ごろまでにすでに日本に伝わり、しかも、中世までに関する限り、日本人の孟子に対する批判ないし忌避の痕跡が全く見られないと指摘した<sup>6</sup>。また、筆者が日本伝存最古の正史『日本書紀』を読む際も、その中に孟子思想の要素が見え隠れしていることに気づいた。よって、本稿では、『日本書紀』の記事を細か

く検討することを通じて、『日本書紀』が成立した奈良時代において、孟子の思想が受容されたのかについて考えてみたい。

## 一. 孟子とその政治思想

### 1. 孟子の経歴

司馬遷は『史記』卷七十四・列伝第十四・孟子荀卿列伝において、次のように孟子を記述した。

「孟軻、騶人也。受業子思之門人。道既通、游事齊宣王。宣王不能用。適梁。梁惠王不果所言、則見以爲迂遠而闕於事情。當是之時、秦用商君、富國彊兵、楚・魏用吳起、戰勝弱敵、齊威王・宣王用孫子・田忌之徒、而諸侯東面朝齊。天下方務於合縱連衡、以攻伐爲賢。而孟軻乃述唐・虞・三代之德。是以所如者不合。退而与萬章之徒、序詩書、述仲尼之意、作孟子七篇。」<sup>7</sup>

以上の記述から、孟子の生涯をある程度伺い知ることができる。つまり、孟子は若い頃孔子の嫡孫・子思の門人について学び、道に精通して社会的影響力を持つようになったら、諸国を周遊して諸侯に遊説するようになった。孟子の生きた時代は戦国の七雄をはじめとする諸侯国が存亡をかけて互いにしのぎを削り合う時代であるが、「士」階層が最も活躍した時代でもあった。しかし、孟子はもっぱら唐・虞・三代の帝徳を唱導して時勢の要求に遠いため、どこに行っても受け入れてもらえなかった。そこで故郷に引退して、弟子と共に詩経や書経を講述し、孔子の意とするところを祖述して、『孟子』七篇を著したという。

### 2. 孟子の政治思想

孟子の思想は政治思想と倫理思想に大別できる。前述したように、日本で排除されていたのは主に孟子の政治思想の中の湯武放伐思想である。本稿の考察で使用する史料『日本書紀』の帝紀としての性格を考慮した上、ここでは孟子の政治思想を概観してみたいと思う。

孟子の政治思想の核心的な部分は「仁政」にあると思われる。『孟子』卷七・離婁章句上に「孟子曰、三代之得天下也以仁、其失天下也以不仁。」<sup>8</sup>とあるように、孟子は仁政を行う者こそ天下を得ることができると説いた。さらに、孟子は『孟子』卷三・公孫丑章句上において「以力假仁者覇。覇必有大国。以德行仁者王。王不待大。湯以七十里、文王以百里。以力服人者、非心服也。力不贍也。以德服人者、中心悦而誠服也。如七十子之服孔子也。」<sup>9</sup>と述べ、古今の君主を「王者」と「覇者」とに分け、領土や軍力を拡大する覇者としてではなく、徳をもって

仁政を行う王者として天下を得るべきだと主張した。この上、『孟子』巻七・離婁章句上に「得天下有道、得其民、斯得天下矣。得其民有道、得其心、斯得民矣。得其心有道、所欲與之、聚之、所惡勿施爾也。」<sup>10</sup>とあるように、孟子は天下を得ようとする者にとって民心を得ることの重要性を強調し、仁政を行うことの目的を明らかにした。孟子のこうした政治主張は「民爲貴、社稷次之、君爲輕。」(『孟子』巻十四・尽心章句下)<sup>11</sup>という一句に端的に現れている。

とは言え、孟子は君主の権威が直接民に由来すると考えたわけではなく、天によって与えられたものであると主張した<sup>12</sup>。民衆の承認及び支持が君主統治の合法性を判断・検討する尺度と見なすため、孟子は商の湯王と周の武王がそれぞれ夏の桀王と商の紂王を追放して新しい王朝を始めたことの合理性を認めたのである。『孟子』巻二・梁恵王章句下に「賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。殘賊之人、謂之一夫。聞誅一夫紂矣、未聞弑君也。」<sup>13</sup>とあるように、孟子は仁の行いをそこなうような者を賊と、人の道をそこなうような者を殘と称し、殘賊の人はもはや君主ではなくなり、単なる一人の卑賤な男に過ぎないと述べ、商の紂王を放伐した周の武王の行為を家来が君主を殺したとは見なさなかったのである。

## 二、日本における孟子受容

### 1. 江戸時代以前

前述したように、寛平三(891)年ごろに成立した日本最古の勅撰漢籍目録『日本国見在書目録』に「孟子十四齊卿孟軻撰趙岐注、孟子七陸善経注」という記載がある。『日本国見在書目録』は平安時代の学者・藤原佐世(847～898)が宇多天皇の勅命を受けて当時日本に現存していた漢籍をもとに編纂したものであり、貞観十七(875)年に冷然院が焼けて累世の書物の多くを失ったことが編纂の契機とされている。目録には易家から惣集家まで、合計40分野の漢籍の題名・巻数・著者名などが記されており、この目録から、遅くとも平安時代中期までに漢代の趙岐と唐代の陸善経が注釈した『孟子』がすでに日本に伝わったと伺える。

『旧唐書』と『新唐書』には陸善経伝はなく、彼についての記録が両書に散見される程度であるところから見れば、陸善経の著述は当時の中国人にそれほど重要視されていなかったと考えられる。これに対し、日本においては、陸善経の著述が認められ、『日本国見在書目録』に関して言えば、陸善経が注釈した漢籍が八種も収録されているのである<sup>14</sup>。陸善経の著述がたくさん日本に伝わったことについて、蘭翠氏は「陸善経の子である陸珽が使として日本に遣われた際に持ち込んだか或いは遣唐使によって日本に持ち帰ったのではないか」と推測した<sup>15</sup>。陸善経

の生没年は未詳であるが、唐の玄宗（685～762）の時に官途についていた人物であると思われ、彼の注釈が後の孟子の「昇格運動」に貢献するものとなった<sup>16</sup>。

趙岐、陸善経の注釈した『孟子』を参酌・照合して成立した孟子の注釈書の中に、宋代の孫奭（962～1033）の撰した『孟子音義』がある。前掲した藤原頼長の日記『台記』に「孟子十四卷、首付、永治元年、同音義二卷、首付、永治元年」とあるように、遅くとも平安時代末期までに孫奭の撰した『孟子音義』二巻がすでに日本に伝わり、『孟子』の意味及び発音に対する解説が一部の知識人に読まれていたとことが伺える。

寛平六（894）年に菅原道真の建議により遣唐使が停止されて以来、中日間の学術交流が大幅に縮小され、さらに、西夏や遼と対峙して対外政策に苦慮していた宋王朝は、国内事情の漏洩を恐れて、正史・実録といった書物の国外輸出を厳しく禁じていた。それゆえ、平安時代中期以来の儒学を受容は唐代儒学受容の延長線上にあった。そして、鎌倉時代には、儒学の経典としての『孟子』が宋学の一部として日本に伝ったと考えられる。

## 2. 江戸時代

江戸時代には、朱子学が官学とされたことにより、朱子学にて四書の一つに数えられる『孟子』は儒学研究家のみならず、武士階級にとっても必読の倫理書に格上げされた。そんな中、『孟子』が日本人に爆発的に普及するようになった。孟子研究の代表的な人物として、林羅山、古学の山鹿素行・伊藤仁斎・荻生徂徠、国学の本居宣長、後期水戸学の藤田東湖、吉田松陰などが挙げられる<sup>17</sup>。

## 三、『日本書紀』の成立と漢籍による潤色

### 1. 『日本書紀』の編纂

『日本書紀』は日本に現存する最古の正史として、日本の古代史研究にとって極めて貴重な資料である。三十巻からなるこの歴史書は神代から持統天皇までの朝廷に伝わった神話・伝説・記録などを漢文の編年体で記述した。その成立の経緯について、『日本書紀』に続いて成立した正史『続日本紀』の養老四（720）年五月癸酉条に、「先是。一品舍人親王奉勅修日本紀。至是功成奏上。紀卅卷系圖一卷。」<sup>18</sup>とあるが、編纂事業の始まる時期が明記されていない。現在の歴史学では、一般的に『日本書紀』天武天皇十（681）年三月丙戌条に記されている天皇が大極殿で6人の皇子と6人の臣下に対して帝紀と上古の諸事の編纂を命じたことを『日本書紀』の編纂事業の出発点と見なしている<sup>19</sup>。天武天皇が正史の編纂事業を推進したことの背景に、皇極天皇四（645）年の乙巳の変で朝廷の歴史書を保管して

いた書庫が炎上して『天皇記』、『国記』など数多くの歴史書が失われたことや、天智天皇称制二（663）年に倭国・百済遺民の連合軍が白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗して東アジアにおける倭国存立の危機を迎えるなか国家意識が高まった<sup>20</sup>ことが挙げられ、古代統一国家成立の由来、すなわち大和朝廷による全国統治のゆえんと正統性を内外に顕示することが『日本書紀』編纂の目的であると言えよう。

## 2. 『日本書紀』の作者と漢籍による潤色

森博達氏は、その論考『日本書紀の謎を解く——述作者は誰か』（中公新書、1999年）において、『日本書紀』30巻に用いられている漢文の用法から、『日本書紀』の記事を $\alpha$ 群（巻14～21、24～27）、 $\beta$ 群（巻1～13、22・23、28・29）と巻30に区分し、 $\alpha$ 群は持統朝に渡来唐人の続守言・薩弘恪によっておおむね正確な漢文で著述され、 $\beta$ 群は文武朝に山田史御方によって和音と和化漢文で著述され、巻30は元明朝に紀朝臣清人によって著述されたものであり、三宅臣藤麻呂が三グループの文章に対して漢籍による潤色を行ったと指摘した<sup>21</sup>。

潤色に利用された漢籍について、小島憲之氏は、史書の『史記』・『漢書』・『後漢書』・『三国志（呉志・魏志）』・『梁書』・『隋書』、類書の『芸文類聚』、文学作品の集成である『文選』、仏典の『金光明最勝王経』、その他の『淮南子』・『六韜』・『古列女伝』が直接利用されたものであると指摘した<sup>22</sup>。漢籍の経史子集というあらゆる部門にわたるとされてきた『日本書紀』の文章の出典の多くが類書という利便な書に由来していると思われる<sup>23</sup>。

## 四、『日本書紀』と孟子の政治思想

ここでは森博達氏によって $\alpha$ 群に分類された巻11の仁徳紀、巻22の推古紀の記事に対する分析を通じて、孟子の政治思想の受容について考えたい。

### 1. 仁徳紀

巻11は仁徳天皇の一代記であり、応神天皇の崩御後、太子・菟道稚郎子（母は妃・宮主宅媛）と異母兄の大鷦鷯尊（後の仁徳天皇。母は皇后・仲姫命）とが皇位の継承を互譲し、三年間も空位となり、永らくの空位が天下の煩いになると思ひ悩んだ菟道稚郎子が自殺したことから記し始める。『日本書紀』応神天皇十五年八月条・応神天皇十六年三月条・応神天皇四十年正月条によれば、菟道稚郎子は百済から日本に渡った阿直岐と王仁を師に典籍を学び、父から深く寵愛されて、弟でありながら太子に立てられた<sup>24</sup>。儒学の教育を受けてきた菟道稚郎子は、「今

我也弟之。且文献不足。」<sup>25</sup>と述べ、長幼の序に則るべきこと及び自分に知識と賢明さが欠けていることを理由に、即位することを固辞した。これに対し、大鷦鷯尊は「先皇謂、皇位者一日之不可空。故預選明德、立王為弔、(中略)我雖不賢、豈棄先帝之命、輒從弟王之願乎、」<sup>26</sup>と述べ、先帝の英断に背くわけにはいかないとして弟の要請を拒否した。この部分の記述には、儒学的な徳治主義と嫡長子相続を理想とする観点が貫かれていると言えよう。

菟道稚郎子が自殺した後、大鷦鷯尊が即位して難波に都を定めた。宮屋の質素節儉を極めた天皇は「此不以私曲之故、留耕績之時者也。」<sup>27</sup>と述べ、自分勝手な用のために人民の耕作や機績の時間を奪わないという考え方を明らかにした。さらに、仁徳天皇四年二月条に、天皇が高台に登って遠望し、民の竈に煙を立たないのを見て、「朕聞、古聖王之世、人人誦詠徳之音、家家有康哉之歌。今朕臨億兆、於茲三年、頌音不聆、炊烟轉疎。即知、五穀不登、百姓窮乏也。」<sup>28</sup>と述べ、五穀が実らず、百姓が窮乏していることを知ったとある。これを受け、天皇は同年三月に「自今以後、至于三載、悉除課役、息百姓之苦。」<sup>29</sup>という詔を出した。免税から三年後の四月に、天皇は再び高台に登って遠望すると、民の竈に煙が多く立ち上っていることから百姓が裕福になったことを判断し、皇后に「其天之立君、是為百姓。然則君以百姓為本。」<sup>30</sup>と述べ、君主たる者は百姓を一番大切にするべきだという政治理念を表明したのである。

以上見てきた『日本書紀』仁徳天皇即位元年から七年までの一連の記事は、仁徳天皇の「百姓のことを大切にし、徳をもって仁政を行う聖帝像」を浮き彫りにしたのである。こうした聖帝像は孟子の理想とした君主像によく合致していると言えよう。孟子は『孟子』巻一・梁恵王章句上において、「王如施仁政於民、省刑罰、薄税斂、深耕易耨、壯者以暇日修其孝悌忠信、入以事其父兄、出以事其長上、可使制梃以撻秦・楚之堅甲・利兵矣。」<sup>31</sup>と述べ、仁政を行う際の具体策を提示し、その中に税の取り立てを少なくするというものがある。仁徳天皇が百姓の苦しみを癒すために三年間すべての課役を免除したというやり方はまさに孟子の説く仁政そのものである。また、前掲した「其天之立君、是為百姓。然則君以百姓為本。」という文の前半部分は『荀子』大略篇第二十七にある「天之立君、以為民也。」に由来し、後半部分が『礼記』緇衣篇第三十三にある「民以君為心、君以民為本。」に由来すると思われる。同じく儒家の『孟子』を以て潤色を施さないものの、この文の表そうとしている政治理念は、詰まる所孟子の説く「民為貴、社稷次之、君為輕。」そのものではないか。

仁徳紀によれば、天皇の仁政が功を奏し、仁徳天皇七年九月に百姓が宮室の修理や納税を申し出たが、天皇がそれを断り、さらに三年後の十年十月になってよ

うやく許した。すると、百姓は命令されることもなく、昼夜を問わずに競って宮室の建造に励んだ。これにより、宮室がまもなく完成したという。「故於今称聖帝也」<sup>32</sup>とあるように、仁徳天皇が聖帝と称されたのである。百姓が自ら宮室の修理や納税を申し出たり、宮室の建造に励んだりすることは、仁徳天皇の仁政が百姓の心を得た証拠であり、孟子の説く「得天下有道、得其民、斯得天下矣。得其民有道、得其心、斯得民矣。得其心有道、所欲與之、聚之、所惡勿施爾也。」を裏付けるものとなっている。

## 2. 推古紀

巻22は推古天皇の一代紀であり、聖徳太子を摂政とした天皇の記録には聖徳太子の政治活動に関する記事が多い。太子の政治活動の中で、最も知られているのは「冠位十二階」と「憲法十七条」の制定であり、いずれも儒学思想の影響が伺える。潘暢和氏は「憲法十七条」の第1条、第3～7条、第9～17条に儒学思想が運用されていると指摘した<sup>33</sup>が、筆者から見れば、第12・14・16条には孟子思想の要素が含まれているのである。

第12条は「十二日、国司・国造、勿斂百姓。国非二君、民無両主。率土兆民、以王為主。所任官司、皆是王臣。何敢与公、賦斂百姓。」<sup>34</sup>を内容とするが、中の「国非二君、民無両主。」という一文について、本稿が使用する小学館版の『日本書紀』は『礼記』曾子問第七に見える「天無二日、土無二王。」をその出典と見なしている<sup>35</sup>。曾子問第七のほか、『礼記』坊記第三十と喪服四制第四十九にも同じ文が見える。さらに、『大戴礼記』本命第八十に「天無二日、国無二君。」とあり、『孔子家語』本命解第三十九に「天無二日、国無二君。」とあり、『史記』高祖本紀第八に「天無二日、地無二王。」とあり、『三国志』の巻四十三・蜀書十三・黄李呂馬王張伝第十三、巻四十五・蜀書十五・鄧張宗揚伝第十五及び巻六十四・呉書十九・諸葛滕二孫濮陽伝第十九に「天無二日、土無二王。」とある。筆者から見れば、上掲したもののほかに、『孟子』巻九・萬章章句上に見える「孔子曰、天無二日、民無二王。(中略)詩云、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。」<sup>36</sup>も作者が漢籍を以て潤色を行う際に参考した文献の一つに数えるべきである。理由は次の通りである。第一、『孟子』は孔子の思想を述べる際に、『礼記』、『大戴礼記』、『孔子家語』のように「土」「国」ではなく、「民」という言葉を使用したのである。孟子は民を何よりも重要視していたと前述したが、統計によれば、『孟子』全書において「民」が209回も使用されたのである<sup>37</sup>。第二、「天無二日、民無二王。」の後、『孟子』は「率土兆民、以王為主。」の出典とされる『毛詩』小雅・谷風之什・北山にある「普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。」をも引用し、



「憲法十七条」の構文がこれに似ている。

第14条は「十四曰、群臣百寮、無有嫉妬。我既嫉人、人亦嫉我。嫉妬之患、不知其極。所以、智勝於己則不悦、才優於己則嫉妬。是以、五百之乃今遇賢、千載以難待一聖。其不得賢聖、何以治國。」<sup>38</sup>を内容とし、中に「五百之乃今遇賢、千載以難待一聖。」という一文がある。五百年に一人の賢人に会えるという考え方が『孟子』に由来すると思われ、『孟子』卷四・公孫丑章句下に「五百年必有王者興。其間必有名世者。」<sup>39</sup>とある。このほか、『孟子』卷十四・尽心章句下に「孟子曰、由堯・舜至於湯、五百有餘歳。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歳。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歳。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之。」<sup>40</sup>とあり、五百年ごとに現れる聖賢の名前をも挙げたのである。

第16条の内容は「十六曰、使民以時、古之良典。故、冬月有間、以可使民。從春至秋、農桑之節、不可使民。其不農何食、不桑何服。」<sup>41</sup>であり、「使民以時、古之良典。」という一文に注目したい。小学館版の『日本書紀』に注釈された通り、この一文は『論語』学而第一に見える「子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。」<sup>42</sup>に由来していると思われる。ただし、「使民以時」の方法について、『論語』は深入りせず、これに対し、『孟子』卷一・梁惠王章句上に「不違農時、穀不可勝食也。數罟不入洿池、魚鼈不可勝食也。斧斤以時入山林、材木不可勝用也。穀與魚鼈不可勝食、材木不可勝用、是使民養生喪死無憾也。養生喪死無憾、王道之始也。」<sup>43</sup>とあり、仁政の一環として詳細に述べたうえ、その期待できる効果をも描いたのである。よって、この条は『孟子』を以て潤色した可能性が大きいと言えよう。

## おわりに

『日本書紀』卷27に一代記がまとめられた天智天皇の漢風諡号「天智」は一般的に『韓非子』解老第三十に見える「聰明睿智天也、動靜思慮人也。人也者、乘於天明以視、寄於天聰以聽、託於天智以思慮。」<sup>44</sup>に由来していると思われる。しかし、明治・大正期の小説家・評論家の森鷗外はその漢文に対する深い学識をもとに「帝諡考」を著し、その中で上掲した『韓非子』解老第三十の文の前に、『周書』世俘に見える殷の紂王に程よく愛されて自殺の時も身に付けられていた天智玉を記す文をも天智天皇の漢風諡号の出典として挙げた<sup>45</sup>。森鷗外の指摘を受けて、歴史作家の井沢元彦氏は、天智天皇の諡号は殷の紂王が所持していた天智玉に由来するものであるのに対し、天武天皇の諡号は周の武王を意識したものであり、両諡号には次の君主となるべき有徳の諸侯などが徳を失った君主を放伐する

意味が込められていると主張した<sup>46</sup>。

筆者から見れば、確かに『日本書紀』巻27の天智紀と巻28・29の天武紀を通読すれば、両天皇が対照的に描かれているところが多々確認できる。とは言え、『孟子』の放伐思想がこの二巻に取り入れられているという結論に至るまでは、なお厳密に検討する必要がある。これに対し、本稿で見てきたように、孟子の政治思想における「仁政」、「民本」といった部分は『日本書紀』の一部の記事に確認でき、これらの部分は類書または史書だけを頼りに日本の歴史書に取り入れたとは考えにくい。よって、『日本書紀』の成立した奈良時代において、たとえ『孟子』という書物がまだ日本に伝わらなかったとしても、孟子の政治思想の一部分が何らかな形ですでに日本に伝わり、しかも一部の知識人に国家建設に取り入れられたと言えよう。

#### 注釈

- 1 藤原佐世撰・矢島玄亮著『日本国見在書目録：集証と研究』、汲古書院、1984、pp.116～117。
- 2 藤原頼長著『台記』増補史料大成第23巻、臨川書店、1965、p.100。
- 3 謝肇淛著・岩城秀夫訳注『五雜俎』(2)、平凡社、1996、p.92。
- 4 例えば、江戸後期の蘭学者・桂川中良はその随筆『桂林漫録』において、「孟子はいみじき書なれども、日本の神のご意に合はず。唐土より載来る船有ば、必覆ると云事、古きより云伝へたる所なり。」と記述した(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第一期第一巻、吉川弘文館、p.659)。
- 5 上田秋成著・稲田篤信編著『雨月物語精読』、勉誠出版、2009、p.14。
- 6 井上順理『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』、風間書房、1972、pp.605～607。
- 7 司馬遷撰・吉田賢抗著『史記』(九・列伝二)、明治書院、1973、pp.2～3。
- 8 内野熊一郎著『孟子』、明治書院、1962、p.244。
- 9 同上、p.104。
- 10 同上、p.254。
- 11 同上、p.491。
- 12 『孟子』巻九・萬章章句上に「萬章曰、堯以天下與舜。有諸。孟子曰、否。天子不能以天下與人。然則舜有天下也、孰與之。曰、天與之。」とある(同上、p.331)。
- 13 内野熊一郎著『孟子』、明治書院、1962、p.66。
- 14 『孟子注』七巻のほか、『日本国見在書目録』に収録された陸善経注のものは『周易伝』八巻、『周詩注』十巻、『古文尚書注』十巻、『三礼注』三十巻、『春秋三伝注』三十巻、『論語注』六巻、『列子注』八巻である。
- 15 蘭翠『唐代孟子学研究』、北京大学出版社、2014、p.260。
- 16 蘭翠氏は、唐の代宗の時に、楊綰と趙匡が上書して孟子を科挙試験の科目に入れることを勧めたのがその最初の現れであると指摘した(同上、p.265)。
- 17 郭連友「孟子思想與日本」(『国文学刊』2014年第三期、pp.116～119)。
- 18 黒板勝美・國史大系編修會編『続日本紀』、吉川弘文館、1966、pp.80～81。
- 19 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』③、小学館、1999、p.407注19。
- 20 上田正昭『倭国から日本国へ——画期の天武・持統朝』、文英堂、2010、pp.86～87。
- 21 森博達『『日本書紀』α群的唐人著述説——兼論成書過程与記事的虚実』(王勇主編『東亞座標中の書籍之路研究』、中国書籍出版社、2013、p.145)。
- 22 小島憲之「書紀と渡来書」(『日本史研究』三号、1945)。
- 23 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』①、小学館、1994、p.522。

- 24 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』①、小学館、1994
- 25 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』②、小学館、1996、p.18。
- 26 同上、p.20。
- 27 同上、p.30。
- 28 同上、p.32。
- 29 同上、p.32。
- 30 同上、p.34。
- 31 内野熊一郎著『孟子』、明治書院、1962、p.23。
- 32 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』②、小学館、1996、p.36。
- 33 潘暢和『東亞儒家文化圏の価値衝突——以古代朝鮮和日本の儒家文化比較為中心』、中国社会科学出版社、2012、pp.50~51。
- 34 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』②、小学館、1996、pp.546~548。
- 35 同上、p.548 注 17。
- 36 内野熊一郎著『孟子』、明治書院、1962、pp.327~328。
- 37 陳徳述『儒家管理思想論』、中国国際広播出版社、2008、p.330。
- 38 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』②、小学館、1996、p.548。
- 39 内野熊一郎著『孟子』、明治書院、1962、p.154。
- 40 同上、pp.512~513。
- 41 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『日本書紀』②、小学館、1996、pp.584~586。
- 42 孔子著・吉田賢抗訳著・加藤道理編『論語』、明治書院、1960、p.21。
- 43 内野熊一郎著『孟子』、明治書院、1962、pp.15~16。
- 44 竹内照夫著『韓非子』、明治書院、1964、p.238。
- 45 森林太郎『鷗外全集』、岩波書店、1973、pp.101~102。
- 46 井沢元彦『逆説の日本史 2・古代怨霊編——聖徳太子の称号の謎』、小学館、1994。

参考文献（注に挙げたもの以外）

- 万麗華・藍旭訳注『孟子』、中華書局、2006
- [清]焦循撰・沈文倬點校『孟子正義』（上・下）中華書局、1987
- 野口武彦『王道と革命の間』、筑摩書房、1986
- 松本健一『「孟子」の革命思想と日本——天皇家にはなぜ姓がないのか』、昌平齋出版会、2014
- 「仁徳紀の構成（二）——即位前紀と皇后・氷室・易名・鷹甘部」、『龍谷紀要』第二十七卷（2006）  
第二号